

## 深大寺のギャラリーでの展示会 「ティナラクとバッグ展」

相田 陽子

3年前、母を一人にしておけないと判断し、フィリピンの生活をやめて東京の母の家に住むようになった。母の世話と言っても付きっきりでいる必要もなく、何かしたいと思っていた時、タウン誌のバッグ教室の広告が目に入った。前々から、ティナラクでバッグ作りをしたいと望んでいたの、通い始めた。母が入院したりして半年以上休んだ時もあったが、バッグ作りは生活の一部になっていった。



そしてこの春先、友人から深大寺での展示会を勧められた。ギャラリーは木々に囲まれた木造の一軒家で、雰囲気は素晴らしいが、8坪程の会場を埋めるには私が作ったバッグだけでは到底足りない。そこでバッグ教室の人達にお願いし、作って頂くことにした。再度会場を下見し、現地製品小物・帯用織・教室の人達のバッグ・私のバッグと、分けて展示をすることに決め、展示会開催が具体化していった。不安を感じつつも、準備に追われているうちに開催日を迎え、そして5日間はあっという間に過ぎてしまった。

並木道に面しているの散歩コースになっており、寄ってくれる人は様々だった。犬を連れて人、ギャラリーの展示を楽しみにしている人、「ゲゲゲの女房」の影響で母親が深大寺を訪ねたいと言うので下見に来たという人、子どもの同級生の母親がダバオ出身なので興味があるという人。イベントでの出展と違い、来訪者とゆっくり話げできたのは本当に嬉しいことだった。

皆、入るなり「きれい！」と声をあげ、帰る時は「初めて見た。素晴らしい。」「良いものを見せてもらった。」と賛美と感謝の言葉をかけて下さった。織をしている人からは織に関していろいろ教えて頂いたりもした。織の工程の写真ファイルや1990年にフィリピンで出版されたティボリ民族とティナラクに関する本「Dream weavers」をじっくり見ていく人もいた。準備は大変だったが、こういう形でティナラクを紹介でき、開催した甲斐があったと思った。ただ、先住民族のことを理解してもらうのが難しかったのは残念だった。勿論それが今回の展示会の趣旨ではなかったが。

展示会開催は気苦労もあり、もうこれっきり、という気持ちの反面、もし次行なうなら、ティボリとビラーン民族の伝統織の現状の違いに焦点を当てることで、先住民族の状況への理解が容易になるだろうか、などと考えてもいる。何はともあれ、多くの人の協力を得て、成功裏に終了し、ホッとしている。



### 第3回日比NGOシンポジウム報告

8月25～27日の3日間、ダバオ市において第3回日比NGOシンポジウムが開催されました。在フィリピン日本大使館やJICA関係者約10名、日本人NGO関係者約20名、フィリピン人NGO関係者約60名の参加があり、熱い報告と議論がなされました。当会からは九島が参加、パートナー団体からPFPのロニーさんとPIHSのナプサさんが参加しました。特にナプサさんは先住民族部会において、活動内容とミンダナオのイスラム教徒の現状を報告し、出席者から平和への取り組みを一緒に行おうという提案や、活動を助成する財団についてのアドバイスを受けました。

3日目午前はダバオ市内のNGO訪問でした。ジュースの外袋を使用したバッグを製作することでゴミを減らし、収入向上に役立てている女性グループ、子どもの人身売買に取り組むNGO事務所、そして日系人博物館と80歳の日系人女性からお話を伺う3つのグループに分けられました。それぞれ活動のヒントを得たり、ダバオと日本の関係の歴史を改めて学んだりしたようです。

私はシンポジウム最後に発表する「ダバオ宣言」下書きグループに加わり、「宣言」がどのように作成されるかの過程を学びました。英語の単語ひとつひとつの定義を丁寧に行い、シンポジウムを真摯に総括していきます。この経験を今後の活動に活かしていきたいと思ひます。（九島）